

講談 「わが心なぐさめかねつ」 (後編)

多谷 昇太

創作講談新大和物語「わが心なぐさめかねつ」、後編に御臨席賜わりまして厚く御礼申し上げます。心を込めて、講釈の段、あいつかまつらせていただきます。

えー、さて、ただいまは夏まつさかり。海に山に行楽の楽しい季節ではありますが、人生の春夏秋冬で云えば、御老年の方々は、これは夏とは申せません。実りの秋か、あるいは玄冬、老子が云うところの青春、朱夏、白秋、玄冬のうちの最後になりましょうか。玄冬と云うのは厳しい冬と書いて厳冬、そう理解されている方もおられるかも知れませんが、老子が云う玄冬とは玄人の玄に冬を当てて玄冬と致しております。この心やいかにと申しますと「同、これを玄と云い、玄のまた玄、衆妙の門」というなんとも訳のわからぬ、孔子の論語を読むよりなお難しい、まるで宇宙語のようないまわしでその著、老子道德経の中で説明しております。いくら講釈師とは云え宇宙語まではわかりませんが…えー、というわけにも行か

ず、レクチャーつかまつりますが、早い話が玄イコール同、同じということ、なお且つ源ということになるんだそうです。そこには右も左もなく、上も下も、貧富も男女の違いすらもない。すべては源の一点、最初の一点に帰結する、いわば宇宙の始まりのような状態を云うのだとのこと。男女の違いがないのならこれはオカマですがこれも果して玄なのか、ちよとわかりませんが…えー、まあそれはともかく、そこではオギヤアと生まれた赤ん坊も今際のお年寄りであつてもすべてはこれ同じとなり、誕生をこの世への入り口、死をこの世からの出口と致しますと、これは逆にあの世から見れば赤ん坊の誕生があゝの世では死で、御老人の死があゝの世における誕生とあいなるわけです。巨匠黒沢明監督作品、名画「夢」の中で彼の名優笠井智衆がこの辺のくだりを演じておりましたですね。これを「玄のまた玄」、すなわち入口も出口も畢竟同じ、としているわけです。死も生も本来同じであると老子は喝破しておられました。「衆妙の門」とは衆が「多くの」となり、妙は「妙なる」と取ります。すなわち多くの妙なるものは、事象は、すべてこの玄の門から起こり来たるのだ、となります。要は森羅万象ことごとくこの玄の門より出でざるものなしとなるわけです。そのような

に考えてみれば玄とは宇宙の始まり、ビッグバンのようなものですから、すれば森羅万象ごとくここから始まっているというのもうなずけると思います。さてそれではあらためてなぜ、お年寄りのことを玄冬と云うのか。それは、中国五行哲学に於きましては、冬をただに季節のおわりとするのではなく、季節のみならずすべてをサイクルと見ますから、冬を云うにも春を生む季節ともしているからです。五行哲学の相生（そうじょう）関係は、木（もく）・火（か）・土（ど）・金（ごん）・水（すい）であり、そしてそれはサイクルであり、水（すい）は木（もく）を、つまり水は木々をはじめ万物を生じさせるとし、万生みなもとの季節として、決してただの終りとは見ていないのです。また因みに玄を木火土金水（もくかどごんすい）、宇宙の五元素の内水（すい）、水に当てております。考えてみれば老いて身体が弱まって行くととき、逆に心はピュア化され原初の玄にもどって行く：ような気も致します。ですから冬は終りでありながら始め、また水に当てた万生復活のみなもとたる玄、その両方をさして玄冬と云うわけでございます。さて、何も中国五行哲学を講釈するために私はここに立ったわけではございません。このあたりのことが当講談の主人公、山科則子に

おいてはどうあらわれるのか、ただにそのガイドラインとでもしたかったがゆえでございます。お待たせいたしました。新大和物語「わが心なぐさめかねつ」後編、これよりの講釈とあいなります。

『張扇一擲』さて、乳母（めのと）則子への思いを残しつつ大伴家持が帰京してから早二十日ほどが過ぎ、ここ九州は大宰府の都、大野の里でも秋たけなわとなり、辺り一面の田んぼではお百姓たちが稲刈りに余念がありませぬ。そのお百姓たちのうわさ話から則子は、つい先日奈良の都から新任の少弐が大宰府に着任したことを知りました。博多湾から大宰府にまっすぐ伸びる朱雀大路を、従者たちを従えて行列する様は、それはまあ実に見ものであったなどと口々にほめそやしております。それを聞いて則子は胸をおどらせますが、はて、ではいったいどうやって我子為輔と対面したらいいのか、そもそも対面していいものやら、それがとんと見当がつきませぬ。まさかこちらから大宰府政庁に登庁するわけにも行かず、気ばかりあせらせておりましたところ、昨晚のこと、近在の神社の宮司が突然たずねてまいりまして、「明日、新任の石上少弐様がお供の方々を引きつれて当神社に参拝にまいられる。ついては山科則子殿、あなたを接待に出すようにと、石

上様から直々の御指名があつた」と、そう告げに来たのでした。告げておきながらなぜこのような老女、見どころのない媼（おうな）などに接待を？と不思議がる宮司でしたが、則子は委細構わずかしこまつてそれを拝命いたします。宮司が帰つたあと則子は文字通り歎喜しましたが、しかしはたと思いをめぐらしもします。はて、石上様が自分と為輔を引き合わすことを思し召すのなら、ただに私を大宰府へ登庁させればよいではないか、それなのになぜ…と思索します。かつて大伴家持様、若様も自らを介して私と息子を引き合わせたいとおっしゃられていた。それはおそらく、私につれない態度を取るやも知れぬ為輔の姿勢を恐れてのこと、引いては私を慮つてのことだつたらう。さらには恵美押勝様の乱への連座を恐れる、私の気持ちをも思つてくださったのことだつた…などと回想し、そしてそれをそのまま石上様のお気持ちとして置きかえてみたのでした。為輔を養子として引き受け、養つてくださつた方、神とも手を合わせたいその方に則子は自分のことでこれ以上、いかなる扶助をも賜わることゝを固く、固く自らに禁じています。為輔に合わせてくださる、あるいはただにその顔を見させてくださるだけでもありがたいのに、もしやそのことで何かお心をく

だかれてはいまいか、悩まれてはいまいか…などと、則子は虫の音が深まる中で夜がふけるまで思いをめぐらせるのであります…。

〔張扇一擲、二、三擲〕さて、明くる神護景雲四年西暦七七〇年十月十五日、朝から抜けるような青空が大野の里の上にひろがっております。推古天皇が開かれたという由緒正しき大野城平野神社の前では、宮司、村長（むらおさ）始め、着飾つて威儀を正した村の衆が今や遅しと石上少弐御一行の到着を待ちうけております。則子とは見るやこれも地味ながらかつての女房としての、被衣（かづき）を取つた壺装束（つぼそうぞく）姿でこれ待ち受けております。当神社では延命の水と評判の高い銘水が、泉となつてこんこんと地下から湧き出でており、新たな大宰府赴任の帥なり少弐なりが参拝に来る度に、これを手尺もて奉じるのが習わしとなつておりました。しかしその折り手尺をささげるのは近郷から選ばれた見目うるわしき娘と決まつておりましたのに、今回はこの媼、山科則子にさせよと石上少弐様から直々のお達しがあつたわけでございます。まったく前例のないことで、則子とともに一番前に立つ村長はどうにもこれが合点が行きませんと心構えをうながす風をよそおつて内実をさぐるうと

いたします。

「頼みましたぞ婆様。くれぐれも粗相のないようにな。まずわしが御挨拶申し上げるけん、後はな…」

「はい、段取りのほど宮司様から承っております。ころして、あいつとめさせていただきます」

「うむ、よかよか。それでよか…とこでな、婆様、ひとつだけ教えてくだらんか。いつたいなして石上少弐様はあんたをば指名なされたのか…それを知りたいんじや。きれいな都言葉を使いよることと云い、婆様、あんた、石上様のいつたいなんね？ひよつとして昔の…」

「ほほほ、何でもありません。あらぬことを考えますな。きつと少弐様のおたわむれかなにかでございませう。あれ、う、うわさをすれば彼処…御一行様の御到着のようでございます」と聞き流す則子でしたが、さすがに語尾の最後のあたりは感動で声かふるえてしまいます。思えば我子を手放して幾星霜、いまだ十代の冠者（かじや）に過ぎなかつた為輔がいまは石上家家令にまでなつてくれた。その間御（おん）養父高嗣様はともかく、御養母様や御兄弟の方々からいかなるころなき言葉、仕打ちを受けたやも知れぬ。そばについて慰めも慈しみもできなかつたこのなさけない母

をどうか許しておくれ…などと、いまだはるかに見えるに過ぎぬ行列の中に我が子の顔を思い浮かべつつ、万感の思いで胸を熱くするのであります。もし、たとえ我子為輔が自分を母とわからずとも、また見分けたとしてしかし母と呼ばずとも、則子は委細咎めるつもりはありませんでした。ただただ立派になつた我子の顔を見させてくれるだけでよいと、いまは恩人高嗣様の心の内をもさぐり当てて、ちようど頭上に広がる青空のような清しい思いもて一行を待ち受けます。溢れ出ようとする涙をば、きつとばかり唇を咬んでこらえるのであります。

一方、前後を騎馬武者それぞれ二騎で警護させた高嗣以下文官舎人など十数名ほどが、真中（まなか）に手車をはさみまして、麗々しくもむねむねしくも、いまだ十町（ちよう）ほど先の山すそを曲つてこちらへと近づいてまいります。四名の仕丁に引かせた手車の中から高嗣が「為輔をこれへ」とかたわらを歩く舎人の若者に命じます。うしろを騎馬で来る為輔にこれを伝えると為輔は馬を若者にあずけて、手車の横に来て歩を進めつつ「お呼びでしょうか」と言問う。高嗣はやおら「為輔、前任の同伴様から置き文をいただき、いままで云わなんだが、彼方（あなた）で待つ里衆の

中に、誰やらそなたにとつて大事な人がおられるやも知れんぞ」と伝えます。

「は？大事な人？村長…でございませうか？」

「あな、鳥漣（おこ）を申すな。母君じゃ！そなたの！」

「は、母上がおられるのですか！…あ、あの中に！…」

「いかにも。置きぶみで大伴様からおおせつかったのは、大宰府に我らが着任して数日たつても、おまえから母に会いたいともし云わなければ、その時はそなたの母君則子殿にそれとなく、会える機会だけを与えてやつてほしい。その場でもし、おまえが母君に気づかず、あるいは気づいてもこれを無視するようなら、その時はもはや何をも申さず、何とか言を尽くして則子殿を説得し、奈良の自分のもとに送つてほしいと、そうおせつかったのじゃ。為輔…」

「は、はは」

「これは決して事前におまえに云つてくれるなど、幾重にも念を押されてのこと。じゃがいまこうしておまえに伝えた。そのわけは、まろはおまえが愛しいからじゃ。さすがの大伴様も石上家におけるおまえの立場まではわからぬ。押勝の乱に連座した山科家をまろの妻も、また子らも、いたく恐れ嫌つて、こちらに来ても決して母に会うな、縁を戻すななどとおまえに迫つ

ていること、またおまえが冠者の時以来、養子として舐めて来た辛酸などをな」

「お、大臣（おとど）様…」

「父上でよい。ここには妻も子もおらぬ。おまえはまろが則子殿からあつた大事な子じゃ」

「父上様、まろとても母君のことをみだりに忘れたわけではありません。ただ…」

「ただ、何じゃ」

「ただ、母と別れて早三十五年がたちます。文のやりとりだけではずっと続けておりましたが、それも十五年ほど前からはぶつりと途絶えて消息知れず。しかし三年前になつて奇しくも大伴様からの文で御無事を知り、また文の途絶えたわけをもしりましたが…はたや…いまさらもはや甲斐なきこと。おおせのお方様（養母）の戒めも大いにはばかられ、ましてまろの子良輔の入婿とも重なり…正直苦渋いたしております…この為輔つらつら考えますに、母とても人の子。こちら大宰府に来て以来、別の生活もあつたことでしょう。もしかしたらこちらで別の子などものしてはまいか…などと、ハハハ、そう思わぬこともありませぬ。大伴様のお心使いは重々わかりますが、さて、母君こそ、はたしてまろを見分けられるかどうか…」

「左様な方とはまるには思えぬ。為輔、則子殿からのおまえへの文はとんと読んだことはないが、おそろくその文面からも、まして、決して多くはなかつただろう女官への報酬から、毎月のようにおまえに絹地五反、六反と送り続けてくれた、そのことからしても、おまえに母の真心がわからぬはずがあるまい。どうじや!? 為輔」

「そ、それはいかにもおおせの通りで。まろとても母への何の算段もなく当地へまいったわけではありません。それなりの銀子をたずさえ、またこの地での母への封戸の手筈をも図ろうと…」

「あな、かような物、まろがおまえに代つて万事都合いたす。そうではなく、いったい何が則子殿にとつて一の糧となるのか、おまえでなければ為し得ぬことは何か、それを聞いておるのじや…」

「そうこうするうちに平野神社まで一町ほどの距離へと近づいてまいりました。舍人からの注進もあり、高嗣はこう云つて話をうち切ります。

「じやが：いまはすべてをおまえにまかす。冠者のころに見も知らぬ他家にまいつて、義理の兄弟たちの間で苦勞をして来たおまえだ。まろは心を尽くしたが、かばい切れなかつた面も多々あつたらう。いまここで

おまえが、母君にどういふ姿勢でのぞもうと、まろは委細答めぬぞ…」

「は、はは」

さて、為輔が目をやれば楠木に囲まれた神社の境内には里の衆たちがいまや遅しと、威儀を正して待ちのぞんでいるのが見えます。人の顔までしきべつできる距離まで来ますと、自分為輔ばかりをひたと捉えて見つめる媼の姿に視線が強く引きつけられる。見れば髪の色は雪のように白くふりたれど、あな、おなつかしや、我母則子その人に違いなし。自分をやさしく包むように、しのに見つめるその母の視線に、すっかり忘れていたいまだ冠者のころの、あの日、あの時の光景と思いがよみがえります。いまさらのように、養父高嗣の諫めが胸に沁み来るのであります。しかしとは云え、御（おん）養母、義理の兄弟たちの諫めも確かにこれあり、また我子良輔の顔をものが為輔の脳裡に浮かんでまいります。母則子の姓名はいまや謀反の朝敵と随し、その名をば官人はもとより、里の者たちでさえあるいは知りおるやも知れませぬ。畢竟為輔の心は千々に乱れます。しかしいまはとにかく石上家家令として、また大宰府少貳付文官としての務めをはたさねばなりません。はや境内に到着し村長はじめかしこま



九州・大野城・平野神社

る里衆の前に、また手尺をささげ持ち低頭する母君の
前に進み出でて、為輔は新少弐石上高嗣の名をば朗々
と告げるのであります。
(次号に続く)



大宰府天満宮